

「クローンは反逆せず、それゆえ「人間になる」」¹

——カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』におけるクローンの死の受容を読む

新名桂子

“The clones do not rebel and thus ‘become human’”:
On the Clones’ Acceptance of Death in Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go*

Keiko SHIMMYO

序

カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954 -) の『わたしを離さないで』 (*Never Let Me Go*, 2005) は、ブッカー賞受賞作である『日の名残り』 (*The Remains of the Day*, 1989) に勝るとも劣らぬ傑作との評価があり²、2017年のノーベル文学賞受賞に大きな貢献をしたであろうことは容易に想像がつく。しかし、1990年代後半のディストピア版イギリス社会 (架空) を舞台としている本小説は、実は、多分に非西洋的な価値観を持った物語であり、一般の読者³、特に一般の西洋人読者にとってはかなりの違和感があるらしいことも分かっている。とりわけ、結末における臓器提供の「使命完遂」 (complete) と名付けられた死⁴ という苛酷な運命を、クローン人間 (以下、クローン) がわずかな抵抗は見せつつも最終的には静かに受け入れる態度は、早い時期から多くの読者や研究者を悩ませてきた。つまり、いったいなぜクローンはもっと抵抗しないのか、また逃亡しないのか、ということである。

クローンの消極的に見える生き方への読者の疑問に対して、イシグロはあるインタビューで、自分の興味は反乱してシステムを攪乱する人ではなく、運命を受け入れる人の方にあると言う。

私が昔から興味をそそられるのは、人間が自分たちに与えられた運命をどれほど受け入れてしまうか、ということです。……

……自分の仕事、地位を人は受け入れているのです。そこから脱出しようとしません。実際のところ、自分たちの小さな仕事をうまくやり遂げたり、小さな役割を非常にうまく果たしたりすることで、尊厳を得ようとします。……

われわれは大きな視点を持って、つねに反乱し、現状から脱出する勇気をもった状態で生きていません。私の世界観は、人はたとえ苦痛であったり、悲惨であったり、あるいは自由でなくても、小さな運命のなかに生まれてきて、それを受け入れるというものです。……そういうことが、システムを破壊して反乱する人よりも、私の興味をずっとそそって

きました。(大野 181-82)

しかしながら、この説明ではイシグロの意図は分かるものの、クローンが静かに死を受け入れることの、物語における意味や重要性まではよく分からない。しかし、死を静かに受容するクローンの受動性あるいは消極性を読者がどう受け止めるかということこそ、この物語を納得いくものとして受け入れられるかどうかの分かれ道なのではないか。つまり、クローンのこのような消極的とも見える死の受容が納得いくものとして読まれるならば、物語は成功しているということであろう。逆に、クローンの死の受容に違和感があるのなら、その読者にとって物語は十分に成功していないということになる。

ところで、非常に興味深いのは、読者がクローンの生への執着のなさに違和感を持つかどうかは読者の文化背景によって違うらしいことだ。筆者の場合、クローンが理不尽で残酷な死を受け入れてしまう結末に、若干の歯がゆさを感じなかったわけではないものの、それほど大きな違和感を持つことはなかった。この物語には、なぜクローンがこのような運命を受け入れるのかということが用意周到かつ丁寧に説明されており、この結末は必然であるように感じられたからである。

これに対して、筆者の身近にいた二人の西洋人読者の反応は大きく違っていた。イギリス人の友人に本作を薦めたところ、感想の第一声は「クローンは日本人だ」というものであった。このコメントには驚いたが、この意味するところはおそらく以下のようなことと推察される——クローンが結末でとった死の静かな、ある意味、情けない受容は、イギリス人の自分ならばあり得ない。イシグロがこんな物語を書いたのは彼が日本人の出自を持つからであろう⁵。このイギリス人にとってはそれくらい違和感のある結末であつたらしい。また、筆者の大学の英文学の授業で本小説について討論を行った際に、あるアメリカ人学生は、「クローンはなぜ逃げないのか。自分なら逃げる」という感想を出した。この感想も、先のイギリス人のものと同様、自分なら理不尽な死を唯唯諾諾と受け入れるなんてとんでもないということの表明と言えよう。これに対して、日本人学生は、授業期中盤までは様々な意見があつたものの、読み最終段階にはいるとそのほとんどが自分もクローンの立場ならば同様の態度をとるだろうという意見であつた。

上記の反応は限られた数のものでしかないので、一般化するには無理がある。しかし、『わたしを離さないで』を読む日本人の反応と西洋人の反応には、個人差というだけでは説明しきれない文化背景の違いが大きく影響しているのは間違いない。本小説は、一般の日本人読者には思いもよらないほどの衝撃と違和感を西洋人読者に与えている可能性があるのだ——とはいえ、西洋の圧倒的な影響下にある現代日本において、西洋人読者とあまり変わらない反応をする日本人読者や研究者が増えつつあるのは確かであるけれども。

さて、この文化背景による反応の違いを適確に指摘しているのが Mark Jerng である。ジャーングは、本小説についてある読者が書いた「物語の登場人物に自分たちの運命を受け入れさせ、それから逃げさせないことにより、イシグロは、彼らが決して十分に自己実現した人間 (fully realized person) ではないことを示そうとしたのだ」というコメントについて、この「十分に自己実現した人間」という概念は、「人間とは反逆する者である」(humans are people who rebel) とする文化や国家の慣習に依拠していることは明らかであると言う (Jerng 382)。そして、次のように説明する——「イシグロがこれらのクローンを人間として描き損ねたというこ

とではない。そうではなく、彼は、個性化（自己実現）⁶という語りの軌跡を逆転させた物語（a story that reverses the narrative trajectory of individuation）を書いたのだ。……この物語は、解放を求める読者の願いを叶えないゆえに、はるかに問題含みの物語となっている。すなわち、クローンは反逆せず、それゆえ「人間になる」（the clones do not rebel and thus “become human”）」（Jerng 382）。

ジャーングの言う「人間とは反逆する者である」とする文化が西洋文化のことであることは明らかである。そして、「逆転させた物語」とは、非西洋の物語、つまり、作者の日本人性に基づいた日本的な物語ということであろう。ジャーングは、鋭い明晰さと繊細さでもって、世界中どこでも「人間とは反逆する者である」という西洋の価値観が通用するわけではなく、それとは真逆の価値観——反逆しないことにより人間となる——があり得ると看破して、この物語において、「クローンは反逆しないので、十分に自己実現した人間（＝完全な人間）ではない」という見解が物語の本質から大きく外れていることを鋭く指摘しているのである。

本論では、上記の筆者の体験とジャーングの見解を糸口として、「人間とは反逆するものである」とする西洋の価値観と「反逆しないことにより人間になる」という日本的価値観の両方を視野に入れながら、静かに死を受容するクローンの受動性の持つ意味を探り、その上で本作においてクローンの死の受容がいかに重要か、またいかなる意味で重要かを論じる。

1. クローンの抵抗と死の受容について

クローンは最後、静かに死を受容するとは言え、決して無抵抗に喜んで死ぬわけではなく、少しでも生き延びることを願って死という運命に抵抗をしているのも確かである。そこで、主人公で語り手でもあるキャシー（Kathy）、彼女の親友で後に恋人となるトミー（Tommy）、およびキャシーのもう一人の親友で三人の中でリーダー格のルース（Ruth）の三名の主要人物について、それぞれの抵抗と死の受容を概観する。

(1) ルースの場合

三人の内、最初に「使命完遂」するのはルースである。ルースは、幼い頃からキャシーに対してお姉さん気取りの態度をとっており、キャシーに対して優位に立とうという気持ちが見え見えの気の強い人物である。そればかりか、キャシーとトミーの強い絆を分かっているが二人の間を引き裂いてトミーを自分の恋人にしてしまうことから、自己中心的な性格であることも分かる。その一方、機嫌の良いときはキャシーを助けることもあり、キャシーもルースを頼りにしているなど、キャシーにとって大切な人物であることも確かである。また、トミーも含めた三人のうちでリーダー格でもあり、ヘールシャム（物語前半の舞台であるクローン養成のためのエリート校）を出た後のコテージでの生活においては、ヘールシャム出身者以外に対してヘールシャム出身者の代表者として振舞っている。

では、ルースは苛酷な運命に対してどのように抵抗しているだろうか。彼女はコテージでの生活において、ヘールシャムの保護官が卒業生に持たせた「宝物（収集物）」（a collection/collections⁷）を早々に手放してしまうなど、過去への執着を捨てて現実に適応する傾向があるのだが、そのような彼女もささやかながら抵抗を見せる。それは、自分の「ポシブル」探しである。「ポシブル」（a possible [136、イタリクスは原著]）とは、クローンの複製元であり、我々

の世界で言うところの「親」のような存在である。コテージ時代のある日、コテージでの先輩にあたるロドニー (Rodney) というクローンが、ノーフォークに行った時にルースのポシブルらしき人を見つけたことから、彼とその公認パートナーのクリシー (Chrissie) に、ルース、キャシー、トミーを加えた五名がルースのポシブルを探すためにノーフォークへ車で遠出することになる。ルースのポシブルらしき人とは、あるオフィスで働く女性であったが、その女性を間近で見るとルースのポシブルとは言えないことが誰の目にも明らかになり、ポシブル探しは失敗に終わる。クローンが自分のポシブルに会おうとすることは、クローンによる臓器提供制度 (以下、クローン制度) を遂行する側からすると非常に問題があり、決して奨励されることではない。このポシブル探しは、ロドニーが主導しており、ルースはそれに応じたただけなので主体的なかかわり方ではないのだが、それでも彼女がポシブル探しに参加したことにクローン制度への抵抗を読み取ることが出来る。

しかし、皮肉なことにポシブル探しの不首尾はルースに生きることへの希望を失わせるほどの大きな打撃となってしまふ。彼女は、自分たちクローンの複製元がオフィスで働くような普通の人間ではないことくらい分かっていたと言い、“We’re modelled from trash. Junkies, prostitutes, winos, tramps. Convicts, maybe, just so long as they aren’t psychos.” (164、イタリクスは原著) という自虐的なことまで言って仲間へ八つ当たりする。この事件がルースに生きることへの希望を失わせてしまったかのようで、その後の彼女には生への執着が見られなくなる。ポシブル探しの失敗がルースに苛酷な運命を受け入れさせたかのようである。

ルースがその運命を受け入れる場面は非常に興味深い。物語の終盤で、一回目の提供で大きなダメージを受けたルースの噂を聴いたキャシーが彼女の介護人になることになり、二人は再会する。程なく、ルースが提供者の間で話題になっている湿地に座礁した船を見に行きたいと言いだしたため、キャシーの車で、別の回復センターにいるトミーも誘って三人でこの船を見に行くことになる。ルースはこの小旅行の帰り道、キャシー (とトミー) に対して突然、自分の罪を告白する。本当は、自分ではなくキャシーこそがトミーとカップルになるべきと知りながら二人の間を引き裂いてしまった——これがルースのキャシーに対する最大の罪だということである (228)。ルースは、この罪が許されるとは思わないがキャシーとトミーに、「猶予」 (deferral [228]) を願い出て、(失われていた二人の関係を) 「取り戻して」欲しいと言う

—— “I’m not asking you to forgive me for that. . . . What I want is for you to put it right. Put right what I messed up for you.” (228); “You and Tommy, you’ve got to try and get a deferral. If it’s you two, there’s got to be a chance. A real chance.” (228)。「猶予」とは、ヘルシャム出身者の特権として、クローン同士のカップルがお互いに真に愛し合っていることを証明することが出来れば、臓器提供を数年猶予してもらい、その間、二人で幸せに暮らすことが出来るという噂話に基づく臓器提供の執行猶予のことである。ルースは二人が猶予を願い出ることが出来るように、ヘルシャムに時々姿を見せていたマダム (Madame) という女性の住所のメモを手に入れており、これをトミーに渡していつか二人が「猶予」の獲得に挑戦するよう懇願する。ルースのこのような態度は、彼女のこれまでの自己中心的な行動からは想像もつかないものであり、キャシーもトミーも面食らう。特にキャシーは “It’s too late for that. Way too late.” (228) と言って大きく反発しさえする。しかし、この場面でのルースには罪の償いとしての他者への配慮が見え、悟りの境地にいるかのようである。ルースは、「使命完遂」の運命から逃げることは考えていない。その代わりに、キャシーとトミーに少しでも長

く二人で幸せに暮らしてもらいたいと願うのである。

ルースは、ポシブル探しの段階ではまだ希望や理想を捨てていなかったが、それが失敗したことによって人生を諦めてしまった。そして最後は、自分のためではなく二人の親友のためにクローン制度の掟を破ってまでマダムの住所を手に入れる。ルースの人生最後の抵抗は自分のためではなく他者のためであった。

(2) トミーの場合

ルースの次に「使命完遂」するのはトミーである。トミーは、キャシーにとってソウルメイト（魂の伴侶）とも言えるほどの近い仲であり、お互いに強い絆で結ばれている。しかし、前述の通りトミーと公認カップルとなったのはキャシーではなくルースであった。彼は、ヘールシャムでの評価のものさしである創造性の点で落ちこぼれており、時々同輩の男子生徒から仲間外れにされるなどのいじめに遭っている。しかし、非常に繊細で優しい心を持つと同時に鋭い洞察力と知性を持ち、クローンである自分たちの状況について自らの力で真実を見抜く能力を備えたほぼ唯一のクローンである。

トミーの運命への抵抗はどのようなものであろうか。彼の第一の抵抗は癩癩で表現されている。トミーは、幼い頃から理不尽なことをされると癩癩を爆発させており、癩癩は彼のトレードマークのようなものであった。物語の終盤で、キャシーはこの癩癩について、“the reason you [Tommy] used to get like that was because at some level you always knew.” (270、イタリクスは原著)と言う。トミーは最初、自分が全て知っていたなどということは否定するが、すぐに考え直してこれに同意する——“Maybe I did know, somewhere deep down. Something the rest of you didn’t.” (270)。つまり、トミーの癩癩は、その当時は彼自身も気付かない無意識の抵抗だったと考えられる。

第二の抵抗は、ヘールシャムの謎をあたかも探偵のように解いて真実を知ろうとする態度である。例えば、彼は、マダムがヘールシャムの生徒の創作物を展示館（Gallery）へ持っていくことについて推理し、それは生徒の魂を見るためだという自説を持つにいたる。キャシーと共にマダムの家に「猶予」を求めて行った時、彼はこの考えを語り、そこにいたヘールシャムの元校長のエミリ先生（Miss Emily）からその考えが概ね正しいことを知らされる（255）。つまり、彼はヘールシャムにさまざまな嘘や隠し事がある中で、その真実に迫ることができた稀有なクローンだったのだ。クローン制度の真実を知ることは、抵抗のために最も重要な第一歩である。

第三の抵抗は、臓器提供の「猶予」を願い出ることである。これはすでに述べた通り、死を間近に控えたルースの懇願によるものだが、トミーは自分が「猶予」をもらう資格があることを証明するために、苦手だった絵を書きためるなど積極的に行動している。そもそも、ヘールシャムの元生徒がヘールシャム関係者の自宅を訪れるなどということは規則違反なのだが（252）、それを承知の上での行動である。エミリ先生によると、以前は年に二、三組のカップルが「猶予」を求めてやってきていたとのことなので、彼とキャシーだけが猶予を願い出たわけではないが、それでも相当に勇気の必要なことであったのは確かである。条件を満たす一部のクローンに例外的に「猶予」を認めるという発想がいかにかクローン制度にそぐわないかは明らかであり、これを求める行動はこの制度への強力な抵抗と言ってよい。

このように、トミーは三人のクローンの中でも抵抗する精神が際立つが、それにもかかわらず、不思議なほど従順に使命完遂の運命を受け入れてもいる。まず、ヘールシャム時代のあ

る日、トミーに目をかけてくれていたルーシー先生 (Miss Lucy) から、「(トミーが) 絵を描きたくなければ描かなくてもよい」と以前言ったのは間違いで、トミー自身のためにもぜひ絵を描くようにと言われたのに対する彼の次の答えは、ヘールシャムの教育の裏面を知る読者に恐るべき戦慄と大きな衝撃を与えるだろう——“But I’ll be all right, Miss. I’m really fit, I know how to look after myself. *When it’s time for donations, I’ll be able to do it really well.*” (106、イタリクスは新名)。トミーのこの無邪気な返答は、定められた運命に対するクローンの抵抗がいかに困難であるかを物語っており、彼の賢さと抵抗の精神を知る読者には胸が引き裂かれるような衝撃となる。

第二に、トミーは、キャシーと共にマダムの家に行き、マダムとエミリ先生に「猶予」を願い出るが、「猶予」はただの噂話にすぎずそのような特別措置はないのだということを知った彼の反応には失望と非難と憤りが見られるものの、それは紳士的で抑制されたものでもある——“So, what you’re saying, Miss [Miss Emily],” . . . “is that everything we [the clones at Hailsham] did, all the lessons, everything. It was all about what you just told us? There was nothing more to it than that?” (261)。彼の失望と怒りはエミリ先生とマダムの前では爆発しない。しかし、マダムの家からの帰途、キャシーの運転する車から降りて虚空の闇に向かって狂ったように喚くことから (268-69)、彼がどれほど絶望し、憤っているかが分かる。このような気持ちを抱きながらも、エミリ先生たちの前では礼儀正しくおとなしいトミーなのである。

第三に、「猶予」を諦めた日を境にトミーの態度が変わり、死支度を始めたかのようなのである。自分の最後の見苦しい姿をキャシーに見せたくないから介護人を変えたいと言い、この考えに抵抗があったキャシーもやがてそれを受け入れる。別れをお互いに受け入れた時のトミーの言葉は、二人の人生を川の流れるに例えた深遠なもので、悟りの境地を示している。

. . . “I [Tommy] keep thinking about this river somewhere, with the water moving really fast. And these two people in the water, trying to hold onto each other, holding on as hard as they can, but in the end it’s just too much. The current’s too strong. They’ve got to let go, drift apart. That’s how I think it is with us. It’s a shame, Kath, because *we’ve loved each other all our lives*. But in the end, we can’t stay together forever.” (277、イタリクスは新名)

トミーは、ここで初めてキャシーへの愛を明確に言語化する——「おれたちは最初からずっと愛し合ってたんだ」。二人の残り時間が尽きようとしているこのタイミングが悲しすぎるけれども、この一言のために物語が語られてきたとも言えるほど重みのある言葉である。しかし、この言葉は二人の間の愛の確認に留まらず、生き延びることよりも大切なことがあることを暗にほのめかしてもいる。もはやトミーは生に執着しておらず、悟りの境地にいるのである。

(3) キャシーの場合

物語の主人公で語り手でもあるキャシーについては、物語の中で「使命完遂」が確認されることはないが、物語を語り始めた時から八か月後には現在の介護人から(臓器)提供者へ移行する予定である(3)。つまり、彼女は、三人のクローンの中で最後に「使命完遂」することになっている。彼女は、ヘールシャムの教育方針に従う優等生であり、介護人としての年数がルース

やトミーより長く、その分最も長く生きられているのもそのことと無縁ではないだろう。三人の中では、クローン制度に最も順応したクローンと言えるかもしれない。しかし、彼女も彼女なりの抵抗を見せている。

まず、トミーの抵抗のところで説明した通り、キャシーとトミーは「猶予」を願い出るためマダムの家に行く。「猶予」を願い出ることに関心だったのはトミーの方だが、マダムの家に着いて実際にマダムやエミリ先生に交渉する段になると、緊張しているトミーよりキャシーの方が多くを語ることになる。特に、エミリ先生が、二人は「チェスの駒」(pawns in a game [261]) の中でも「幸運な駒」(a lucky pawn [261])だと言うのに対して、キャシーはクローンの側からの正当な抗議を口にする——“It might be just some trend that came and went,”...“But for us, it’s our life.”(261)。優等生であったキャシーにしてみれば、ヘールシャム関係者への初めての抵抗だったかもしれない。

キャシーの抵抗は、身の回りに起こるさまざまな出来事をよく記憶し忘れないことにも表れている。彼女は過去の思い出を大切にしているが、この点で、キャシーはルースと対照的である。コテージで、ヘールシャムから持ってきた「宝物」を早々に手放したルースは、手放してしまったことを後悔して、キャシーに次のように言う——“You [Kathy] were different. I remember. You were never embarrassed about your collection and you kept it. I wish now I’d done that too.”(129)。「宝物」は過去の思い出を象徴していると考えられ、それを手放すか手放さないかは思い出を大切にすることがどうかにかかわる重大事である。記憶への言及は物語全体に散りばめられているが、特に結末近くの言及は重要である。キャシーが担当しているある提供者が、大切な記憶なのに驚くほど速く消えてしまうとぼやくのに対して、キャシー自身の記憶は鮮明だと言う——“The memories I value most, I don’t see them ever fading. I lost Ruth, then I lost Tommy, but I won’t lose my memories of them.”(280、イタリクスは新名)。思い出を大切に記憶すること、忘れないこと——これは大切なものを失わないために最も基本的であると同時に、最も重要なことでもある。記憶することはキャシーにとって強力な運命への抵抗手段なのである。

記憶と並んで、もう一つ、彼女だけがしている抵抗がある。それは、自分に起こった出来事を他者に物語ることである。そもそもこの物語は、キャシーがあるクローン(名前はわからない)に語る身の上話であるらしいことが、第2章冒頭の“I don’t know how it was where you were, . . .”(13)という彼女の語りから推測されるのだが、このことは抵抗の観点からも重要である。つまり、ある物語を他者に物語ることによって、自分だけの記憶ではなく、より大きな集団の共通の記憶とすることが可能になる。記憶が強力な抵抗であるならば、物語ることはより一層強い抵抗となり得るだろう。

このように静かに運命に抵抗するキャシーだが、これ以上の抵抗に進むことはない。物語の終幕で、トミーが使命完遂してから約二週間後、一人でノーフォークまで車を走らせてトミーの姿を地平線上に空想するのが、彼女が自らに許した精一杯の「甘え」であり、ささやかな抵抗であった。そこからの帰り道、彼女の車が向かった「行くべきところ」(wherever it was I was supposed to be [282])とは、場所としては彼女の住んでいるところであろうが、象徴的には「使命完遂」という名の「死」であろうと思われる。

以上、三人のクローンの運命への抵抗と死の受容を検討した。彼らは三者三様の生きざままで

あり、運命に抵抗もしているのだが、最後は全員おとなしく臓器提供を受け入れ、死から逃げようとはしない。

2. クローンはなぜ死を受け入れるのか

では、クローンはなぜこのように従順に死を受け入れるのか。つまり、彼らはなぜ「臓器提供」という苛酷な運命に反逆したり、そこから逃げたりしないのだろうか。実のところ、この問いへの答えは、イングロにわざわざ問うまでもなく物語の中に十分に用意されており、丁寧に読みさえすればクローンが反抗したり逃げたりしない理由が明確に分かるようになっている。

第一の理由は、クローンが子供時代を過ごすヘールシャムでは、彼らが外界との接触を断たれ、徹底的な情報遮断の中で育てられているということだ。情報遮断の具体的な形の一つは、彼らには「育ての親」がないということである。先述の通り、生物学上の親に近いものは「ポシブル」として想定されているが、わが子を育てる存在としての親は彼らには存在しない。彼らに育ての親がないことが何を意味するかというと、ヘールシャムの保護官が彼らにとって最も近い関係を築く大人であるということだ。つまり、保護官は、第一義的には学校での教師の役割を担っているが、同時に家庭において親が持つ絶大な権力を持つ存在でもある。ということは、我々の世界で家庭において親から子供に行われる教育に近いことが、ヘールシャムにおいては、保護官からクローンに対して行われていることになる。このように、クローンには親がおらず、ヘールシャムの保護官が親に相当する影響力を持っていることから、彼らがヘールシャムでの教育を相対化したり、疑問視したりする視点を持つことが極めて困難な設定となっているのである。

ヘールシャムにおけるクローンの情報遮断のもう一つの形は、仲間内での怖い話 (all kinds of horrible stories [50]) によって彼らがヘールシャムの敷地外へ出て行かないようにしているということである。ヘールシャムの裏手の森は行ってはいけない恐ろしい場所とされており、ある男の子が敷地外に逃げ出した二日後、体が木に結わえつけられ、両手、両足が切り落とされて発見されたという話や外の世界を見たいとフェンスを乗り越えて出て行った女の子がその後、戻りたいと願っても許されず、死んで亡霊となって森をさまよっているという話がクローンの間では流通している (50)。つまり、ヘールシャムでは、クローンを外の世界に触れさせないように恐怖によって彼らの行動を制限し、彼らを外の世界と接触させないようにしているのである。

第二の理由は、ヘールシャムにおける教育が、ルーシー先生によれば「あなた方は教わっているようで、実は教わっていない」(you've been told and not told [79]) という巧妙な形で行われており、これが絶大な教育効果を上げているということだ。「教わっているようで、実は教わっていない」ことについて、後年トミーはキャシーに自説を披露して、保護官がなにか新しいことを教えようとするときには、自分たちが本当に理解できるより少し前に教えるようにすることで巧妙に情報を詰め込むようにしたのだと言う。

... the guardians had, throughout all our years at Hailsham, timed very carefully and deliberately everything they told us, so that we were always just too young to understand properly the latest piece of information. But of course we'd take it in at

some level, so that before long all this stuff was there in our heads without us ever having examined it properly. (81)

子供のころに情報が与えられると、与えられた側はよく理解できないものの、少しは頭に残る。しかし、本当には理解できていないため、それが自分にとって不利だとか、おかしな考えであるなどと気付くことができず、したがって、それに抵抗することももちろんできないのである。

実は、このことは、トミーにおいて劇的なアイロニーをもって衝撃的に描かれている。彼は、ヘールシャムの教育の秘密、つまり、「教わっているようで、実は教わっていない」(79) という教育のからくりを、上記のように上手く説明できるだけの能力がある一方で、先述の通り、ヘールシャム時代にルーシー先生からぜひ絵を描くように言われた時、「提供する時になったら、上手にできますよ」(106)と無邪気に返答する。つまり、彼は、ヘールシャムの教育がいかに自分たちを支配しているかに鋭敏に気付きながらも、その教育のゴール——臓器提供の使命完遂——に疑問を呈することまではできない。三人の中では最も鋭敏で洞察力に富むトミーが、ヘールシャムの教育の前にこれだけ無力であることは大変なアイロニーであり、戦慄を禁じ得ない。

上記から、ヘールシャムの教育が、創造性を養成するという名目の下、クローンの可能性を広げ自由を与えているように一見見えながら、臓器提供が使命であるとのゴールは変えていないため、彼らに与えられた自由や可能性が制限付きであって、結果としてクローンには却って一層残酷な事態となっていることが分かる。育ての親がおらず、外界との接触が禁止されていることから徹底的な情報遮断、および子供の頃からの「教わっているようで、実は教わっていない」という教育方法によって、とても抵抗できないように巧妙に洗脳による支配が行われているのだ。したがって、クローンが臓器提供という苛酷な運命に対して反逆したり、そこから逃げようとしたりすることが不可能であることは明らかである。このように、イシグロはクローンが運命に殉じて死を受け入れることについてその理由を明確に説明している。これを読み取ることで読者にとって、この物語においてクローンがなぜ反逆しないのか、なぜ逃げないのかという問いへの答えは明白である。

3. クローンが死を受け入れることの意味は何か

前節では、クローンが反逆も逃亡もしないことが、物語の設定上、必然となっていることを確認した。つまり、クローンは、愚かだったり、情けなかったりするために反逆も逃亡もできないというわけではないのである。本節では、クローンが大きな抵抗もせず、静かに死を受け入れることの意味をさらに深く掘り下げて考察する。クローンが死を静かに受け入れるのは、物語の設定上、必然であるということ以上の理由があると思われる。彼らの死の受容には、非常に大きな価値逆転——ヒエラルキー（階層構造）の逆転——が仕掛けられており、一般的に受け入れられている価値観を根底から覆すことになっている。以下に、人間／クローンのヒエラルキーの逆転、および生／死のヒエラルキーの逆転を検討する。

(1) 人間／クローンのヒエラルキーの逆転

物語は、クローンの臓器をもらって人間が自らの健康を保持し延命を図ることが制度化され

た世界を描いており、人間が上でクローンが下という権力のヒエラルキーが前提となっている。しかしながら、物語が進行するにつれ、このヒエラルキーが両者の精神性および幸福度の二点において逆転することが確認される。

まず、精神性においてクローンが人間を凌駕して、人間／クローンのヒエラルキーに逆転が起こる場面を見よう。キャシーとトミーが「猶予」を願い出る場面で、マダムもエミリ先生も表面的には親切に対応しているものの、時折、瞬間的にぞっとするほどの薄情さと冷酷さ、また自己弁護を見せる。例えば、当初二人に対応していたマダムは、キャシーに向けて“Do I go too far?”(248)、“Do we continue with this talk? You wish to go on?”(249)等の言葉をかけてくるが、やがてそれらの言葉がキャシーではなくその背後の暗闇にいる別人——エミリ先生——に向けられたものであることが判明する。自分に話しかけられていると思ったのに実はそうではなかったことは、存在を否定されているかのようであり、人間から見たクローンの立場の弱さの表れであろう。

エミリ先生の態度も酷い。「猶予」の話が全くでたらめであるというエミリ先生の話に反応して、キャシーが「追い風か、逆風か。先生にはそれだけのこともかもしれません」……「でも、そこに生まれたわたしたちには人生の全部です」(261)と抗議した時、エミリ先生は、他の施設のクローンに比べればヘールシャムの生徒がどれほど恵まれていることかという論理で自己弁護をするが、そればかりではない。彼女の意識はこれから業者を使って運び出そうとしているキャビネットに向いており、キャシーたちよりもキャビネットの方が大事であることが明らかである——“Yes, that’s true. But think of it. You were better off than many who came before you. . . . I’m sorry, students, but I must leave you now. George! George!”(261); “But she [Miss Emily] was now preoccupied with her cabinet. She began to make some urgent point to the men outside, then left with George, *not looking back at us [Kathy and Tommy].*” (264、イタリクスは新名)。マダムとエミリ先生の態度にはキャシーたちへの差別意識が見え隠れしている。クローンからの抗議に対して自己弁護し、その存在を無視するかのような姿からは、マダムとエミリ先生の人間性や精神性を高く評価することはできない。

これに対して、「猶予」などないと分かった後でも、キャシーとトミーは最後までマダムとエミリ先生に礼儀正しい態度を崩さない。例えば、キャシーがマダムに暇を告げる時、“Thank you for talking to us. Please say goodbye to Miss Emily for us.”(265)と御礼さえ言う。クローンの方が「人間」であるマダムやエミリ先生よりも人間性や精神性において次元が高い存在として描かれているのだ。

次に、幸福度において人間／クローンのヒエラルキーが逆転している場面を見よう。マダムの家にて、キャシーが、トミーと自分が愛し合っているという確信がなければここに来ていない(“Tommy and me, we never would have come and bothered you if we weren’t really sure.”[247])と言うのに対するマダムの反応は大変興味深い。

“Sure?” It was the first time she’d spoken for ages and we both jolted back a bit in surprise. “You say you’re *sure*? Sure that you’re in love? How can you know it? You think love is so simple? So you are in love. Deeply in love. Is that what you’re saying to me?”

.....

“You believe this? That you’re deeply in love? And therefore you’ve come to me for this . . . this deferral? Why? Why did you come to me?” (247、イタリクスは原著)

マダムは、キャシーの言った「確信がある」(“sure”)という言葉は何度も繰り返し、愛し合っているという確信があるなんて信じられないと言わんばかりである。また、「愛し合っているなどとどうして分かるのか」、「愛とはそんなに簡単なものか」とも問いかけている。つまり、マダムにはキャシーとトミーの愛が理解できないということだ。彼女にとって愛は無縁のものであり、誰かと愛し合うということもあり得ないということだろう。「愛し合っている」と言いに来た二人を前にしたこの取り乱しは、このような愛を知らないマダムの寂しさと当惑を表している。

ここで明らかになるのは、愛し合っているキャシーとトミーがどれほど幸せか——マダムよりも、また他の誰よりもどれほど幸せか——ということである。ソウルメイトとも言えるほどの強い絆と信頼関係を築いているキャシーとトミーは、そのような関係を持っていないマダムよりもずっと幸せである。苛酷な運命のクローンであっても、キャシーとトミーは愛し合うことができているために、愛し合うことを知らないマダムよりもずっと幸せであるという逆説が成り立つ。幸福度においても人間／クローンのヒエラルキーが逆転しているのである。

このように、人間／クローンのヒエラルキーが精神性と幸福度の点から逆転している。人間がクローンの命を犠牲にして延命を図ることが制度化された世界では、人間のエゴが肥大しており、彼らが生に執着する姿はあまりにも醜い。これに対して、臓器提供から逃げず「使命完遂」しようとするクローンには高い精神性と尊厳が認められるのである。

(2) 生／死のヒエラルキーの逆転

ところで、人間／クローンのヒエラルキーの逆転はそのまま生／死のヒエラルキーの逆転にもつながる。クローンを犠牲にして人間が生き延びる世界においては、生が死よりも望ましいことが前提となっており、生／死のヒエラルキーは当然である。しかしながら、物語の終盤でこれが逆転する。この逆転は「猶予」をめぐるトミーの行動と決断の中に最もよく表れている。

トミーは、「猶予」をもらってキャシーと共に幸せな数年を過ごすことを真剣に考え、マダムに「猶予」を願い出る。彼には、真に愛していたキャシーとの関係に悔いがあり、それを取り戻すために少しでも長く生き延びたいと願う。これは生への執着と考えられるが、ジャーグも指摘するユングの「個性化」(自己実現)への欲望と言い換えることもできるだろう。トミーは、「猶予」の話に希望をもち、個人(キャシーと自分)の幸福のために生きようとしたのである。

しかし、「猶予」などないこと、ヘールシャムの目的やクローンがどういう存在かが明らかになると、彼は生への執着を手放すかのように、キャシーよりも提供者仲間との関係の方に意識を向けるようになる(271-72)。そして、やがてキャシーを介護人から外すことにする。それは、キャシーの前で見苦しいことになりたくないということと共に(275)、提供者である自分と、提供者ではない介護人のキャシーの立場の違いを意識しているためでもある。トミーは、提供者でないキャシーには提供者である自分の気持ちは分からないと言う——“Kath, sometimes you just don’t see it. You don’t see it because you’re not a donor.”(276)。さらに、彼女に、“Don’t you sometimes wish, Kath, they’d hurry up and send you your notice?”(276)とも言う。トミーの言葉は、彼の意識が生きることよりも死ぬことの方に向いていることを示し

ている。彼にはもはや生への執着は見られず、死を願っている。死んだほうがましではないか、ということだ。それは当然であろう。臓器提供が使命であるクローンにとって、この世界で生き延びることがどれほどおぞましいかということは誰にでも分かる。トミーの言葉は、クローン制度がある世界にこれ以上生きていたくないという拒否であり、生／死のヒエラルキーの逆転を示しているのである。

ところで、生／死のヒエラルキーの逆転について大切なことは、死にゆくクローンに——人間よりも——誇りと尊厳が与えられていることだ。イシグロは、あるインタビューの中で、次のように述べる。

ほとんどの人はある国、ある状況に生まれたら、その限られた世界の価値観の中で、ベストを尽くし、自分の生きる意味を見だし、尊厳や誇りを持って生きようとする。ときにはそれが自爆テロになる、といった犯罪的行為であってもだ。誇りこそが、人間が犬や猫や他の動物と違うことを証明する大切なものであり、私は非常に興味をひかれる。(白木)

トミーは、死を前にして「悟りの境地」に達しているが(本論 80)、彼のこの態度はイシグロの言う尊厳と誇りを表現しているとも考えられる。トミーは、生／死のヒエラルキーを逆転させる言葉と態度によって、尊厳と誇りをもって死に赴くのである。

以上から、『わたしを離さないで』には、人間／クローンのヒエラルキーの逆転、および生／死のヒエラルキーの逆転というラディカルな価値転倒が仕掛けられており、クローンが死を静かに受け入れることにはクローンの尊厳と誇りがかかわっていることが分かる。クローンが苛酷な運命を受け入れる態度は、西洋の「個性化」(自己実現)とは真逆の世界観、つまり、ジャーングの言う「クローンは反逆せず、それゆえ「人間になる」」(382)世界観に基づいているのである。

結 『わたしを離さないで』の衝撃——クローンとは誰か

イシグロは、苛酷な運命から逃げることも反逆することもせず、死を受け入れるクローンをあえて創り上げている。ジャーングの言葉を借りれば、「反逆しないことにより人間になる」(382)クローンを描いているのだ。したがって、クローンがあまり抵抗しないこと、つまり、死を静かに受け入れることがこの物語においていかに大切かということである。さらに言うなら、『わたしを離さないで』は、人間とクローンとの勝負という観点からすると、一見、負けたように見えるクローンの方に軍配の上がる物語なのである。このことに読者が気付かなければ、クローンはただ情けなく、ふがいなく、可哀そうな存在にすぎないであろう。事実はその逆であり、クローンが自らの使命を完遂すべく死を静かに受け入れることにこそこの物語の真の値打ちと衝撃があるのだ。クローンの受動性という形をとりながら、彼らが気高さ、尊厳、誇りにおいて、物語に出てくる「人間」をはるかに凌駕しているのはイシグロの深謀遠慮に他ならない。そして、このことに気付く読者にのみ、本作の持つ価値転倒のラディカルさが理解されるのである。

序において、「クローンは日本人だ」と言うイギリス人の言葉を紹介した。この言葉はある

意味正しいが、50%の正しさである。なぜなら、論じてきたように、物語をよく読めばクローンが日本人に限定されることなく全ての人間であることが理解されるはずだからである。『わたしを離さないで』の重要な秘密の仕掛けは、一見不可解な行動をとっているように見えるクローンが、他ならぬ読者自身であることがやがて理解されるようになっていくということだ。実は、一流の書評家たちはこのことに早くから気付いており、本作を絶賛している。そのうちの一人、カナダ人作家のマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood) の書評における次の言葉は本作の核心を見事に捉えている。

Never Let Me Go is unlikely to be everybody's cup of tea. The people in it aren't heroic. The ending is not comforting. Nevertheless, this is a brilliantly executed book by a master craftsman who has chosen a difficult subject: *ourselves*, seen through a glass, darkly. (*ourselves* のイタリクスは新名)

アトウッドは、このクローンの物語が我々自身の物語であることを理解している。クローンとは、自分に無縁の気の毒な「他者」などではない——我々自身なのである。

『わたしを離さないで』が西洋的な「個性化」(自己実現)のお決まりの物語パターンを踏襲していないこと、また、本作に違和感や驚きを持つ西洋人読者が沢山いるということは、決して本作やイシグロの限界などではなく、むしろこの世には西洋とは真逆の世界観があるという認識への覚醒を西洋世界に促す重要な貢献の証左と考えられるが、実はそればかりではない。本作は、クローンは自分自身なのだという覚醒を、読者——文化背景にかかわらず——に底知れぬ迫力をもって迫ってきている。西洋の価値観を大きく揺さぶった『わたしを離さないで』であるが、この揺さぶりにこそその真骨頂があるのだ。本作がイシグロの偉業である所以である。

注

¹ Jerng 382.

² 例えば、柴田元幸は、『わたしを離さないで』を現時点(2006年4月)でのイシグロの最高傑作と評している(444)。

³ 「一般の読者」とは、読むことの専門家(文学研究者、書評家、作家等)ではない読者というくらいの意味である。

⁴ 厳密に言えば、「使命完遂」(complete)と「死」(death)とは同じものではない。この物語の中で、人間は「死ぬ」ことができるが、これに対して、クローンには、(人間にとっての)「死」が許されておらず、ただ「使命完遂」あるのみである。その意味で、「使命完遂」と「死」とは厳密には区別されるべきものであるが、本論の文脈においては、このことを意識しつつもクローンの「使命完遂」を「死」とも呼んでおり、両者をほぼ同じ意味で使っている。

⁵ イシグロの現在の国籍はイギリスだが、日本人として生まれ、日本人の両親に育てられたことを指している。彼は、長崎に生まれ、5歳までそこで育ったが、父親がイギリスの大学の研究所に招かれたため、家族で移り住み、そこで教育を受けた。1983年にイギリス国籍を取得している。

⁶ 「個性化」(individuation)は、スイスの精神科医カール・グスタフ・ユング(Carl Gustav Jung, 1875-1961)が提唱した概念で、「自己実現」と訳されることもある。ユングは人間の「心理的発達」を中・

後年になっても一生続くものと考えて、人生の課題を大きく二つに分けた。前半の課題が、自分のアイデンティティを確立し、社会的・文化的に適応し、大人としての役割を果たすことであるのに対し、後半の課題は自分のそれまでの人生で活かされていない潜在的な性質や能力を活かして、より「自分らしく」なることである。この自分らしくなることが「個性化」である。(分析心理ドットコム)

⁷Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go* (Faber and Faber, 2005) p. 128. 以下、引用は全てこの版により、本文のかっこ内に頁数で示す。翻訳は土屋政雄訳を使わせていただいたが、一部改変したところがある。

参考文献

Atwood, Margaret. "Brave New World: Kazuo Ishiguro's Novel Really Is Chilling." *Slate*, 1 Apr. 2005, <<https://slate.com/culture/2005/04/kazuo-ishiguro-s-creepy-clones.html>>. Accessed 5 May 2022.

Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. Faber and Faber, 2005.

Jerng, Mark. "Giving Form to Life: Cloning and Narrative Expectations of the Human." *Partial Answers*, 6/2, 2008, pp. 369-93.

イシグロ、カズオ『わたしを離さないで』土屋政雄訳、ハヤカワ epi 文庫、2008 年。

大野和基「第 7 章 愛はクローン人間の悲しみを救えるか——カズオ・イシグロ」『知の最先端』大野和基インタビュー・編、PHP 新書、2013 年、171-211 頁。

柴田元幸「解説」『わたしを離さないで』カズオ・イシグロ、土屋政雄訳、ハヤカワ epi 文庫、2008 年、441-46 頁。

白木緑「誇りこそ人間の証し」『日本経済新聞』（夕刊）、2011 年 2 月 9 日、16 面。

分析心理ドットコム「個性化（自己実現）Individuation」

<<https://bunsekisinri.com/dictionary/jung/individuation/>> 2022 年 5 月 6 日閲覧。